

趣意書：「環境経済史研究会」発足にあたって

－ 産業革命は悲劇の始まりだったかもしれない －

歴史人口学者のトニー・リグリー (E. A. Wrigley) は、英国の産業革命を、エネルギー資源の使用変化の歴史分析に基づき、また精緻な歴史人口学的議論を背景に、英国独自の歴史展開として叙述した。以下の引用には、印象的な最後の言葉「抵抗し難い悲劇の前兆」が含まれている。それは、今の時代に対する決定的な批判であるが、その仮説はまだ十分に検証できていない。

The industrial revolution is usually depicted as a success story. ..., however, the industrial revolution may come to be regarded not as a beneficial event which liberated mankind from the shackles which limited growth possibilities in all organic economies but as the precursor of an overwhelming tragedy—assuming that there are still survivors to tell the tale.

(Wrigley, E.A. *The Path to Sustained Growth: England's Transition from an Organic Economy to an Industrial Revolution*. Cambridge, UK: Cambridge University Press, 2016, pp. 204-5.)

リグリーの著作が確実に証明したのは、英国では、産業革命の遥か以前の時代から有機経済社会からの離脱が開始されていたということである。石炭が世界で初めてエネルギー源として積極的に活用されるようになったのである。16世紀英国での出来事であった。

光合成が生み出すエネルギーに基づく有機経済社会の自然は、人間の営為との相互関係において、全てを実感として生産過程において自覚されるものとして、世界各地で厳然と存在したものである。それが人間の日々の活動から決定的かつ普遍的に分離されるのが19世紀(18世紀あるいはそれ以前から20世紀初頭までの期間であるため、「長い19世紀」という表現が正しいであろう)であった。先進経済社会と植民地社会が地球上で顕在化する、この世紀の環境史を、地球規模で体系的に描くことは実は簡単ではなく、それは多くの環境史が書かれている現状においてもまだない(J. ドナルド・ヒューズ『環境史入門』村山聡・中村博子訳、岩波書店、2018年、99頁)。個々の社会や自然の変化に関する知識が十分に蓄積されていないからである。

「長い19世紀」を考える上で、まさに19世紀そのものに生きたマルクスそしてエンゲルスを語り探ることは、途方もなく価値のあることであり、さらに19世紀を通過するウェーバーを重ねて議論する意義はある意味で永遠に消えない。ただし、もし地球環境を決定的に変化させた人新世が短いものになれば、その長い19世紀は忘れ去られてもいいのかもしれないが、決して将来は楽観できない。

人新世を地質年代としては考えられないほど短く終わらせるためには、19世紀に至る歴史過程そしてその後の人新世に至る歴史過程の全てを再点検する必要がある。さらに、それは一本の経路ではなく、地球上のあらゆる地域で複数の経路があり、それらの経路を明確にするためには、環境はローカルに規定されているということを改めて自覚する必要がある。例えば、爬虫類が8種類しかない英国と514種類のインドネシアとを同列に語ることはできない(国立天文台編『平成25年 理科年表』丸善出版、2012年、1004頁)。

かつてカントが戦争を生み出す根本原因は自然そのものにあると述べたことを思い出す必要がある。自然は不平等なのである。

- 一緒に生活する人間の間での平和状態は、なんら自然状態 (*status naturalis*) ではない。自然状態は、むしろ戦争状態である。言いかえれば、それはたとえ敵対行為がつねに生じている状態ではないにしても、敵対行為によってたえず脅かされている状態である。それゆえ、平和状態は、創設されなければならない。(イマヌエル・カント『永遠平和のために』岩波文庫、26頁)
- さて、自然は、人間が地上のあらゆる場所で生活できるように配慮したが、しかしまた自然は同時に、人間が好みに反してでもあらゆる場所で生活すべきことを専断的に望んだのである。しかもこの「すべし」は、同時に義務概念を前提して、この義務概念が道徳法則を用いて人間をそのように拘束するのではなくて、——自然は自分のこの目的を達成するために、戦争を選んだのである。(同書、62頁)

田中廣の著作『社会関係＝分業論の視座：いま再びマルクス&ウェーバーの智慧に学ぶ』（中央公論事業出版、2021年）を高く評価している。それは、慣れ親しんだ分業化の極地にある学問世界で安住している人間にはとても書くことのできない書物であるからである。しかし他方で、この書を批判的に包摂し、さらに次のステップへと継承していくことも必要である。そこで同氏の了解と賛同を得て、多様な専門家に書評をお願いし、「環境経済史研究会」の発足に機を合わせて、合評会を開催することにした。

経済史と環境史を専門とする私自身の研究活動との関連で、環境史研究の学会ではほぼ完全に分離状態にある経済史と環境史との新たな出会いを求めて、アカデミズムの世界だけでなくあらゆる世界で真摯に生きる人びとが集う場所として、環境経済史研究会 (*Historical Association for Environmentally Local Economy*) の発足を提案したい。そこでは改めて、「経済」を根本から問い直す機会を設け、両者の融合を模索したいと考えている。個々の生命体が生きる生命空間 (*Living Spaces*) とその場所 (*Locality*) から経済と環境を問い直そうと考えている(末尾の参考文献参照)。

生態経済の歴史を扱うグループがあり、また、環境経済史を掲げる動きもある。しかし、経済学史あるいは思想史と経済史さらには多様な自然科学系の議論をも巻き込む一般史としての環境史との接合を明確に目標とするような学術の動きはまだ弱い。環境史には知の境界と限界はない。良質の環境史研究の多くは歴史家ではない研究者や実践家書いていることが多い。さらに田中のような経営者が新たな挑戦として、「環境史をする」(著名な環境史家である *Donald Worster* の言葉) ことがあれば望外の幸せである。

幸い日本では、齋藤幸平の『人新世の「資本論」』(集英社文庫、2020年)によって、「脱成長コミュニズム」が掲げられ、脱経済成長を本格的にめざす経路が明確にされた。そのことによって、マルクスの見直しを一過性のようにはしない次元へと引き上げてくれている。彼のドイツ語の博士論文 (*Natur gegen Kapital. Marx' Ökologie in seiner unvollendeten Kritik des Kapitalismus,*

2014) では、マルクスの手稿の解説が、エコロジスト・マルクスを議論できる、その中心にある。長年続けられてきたマルクス・エンゲルス全集 (MEGA、1970 年代から刊行されている新版) 編纂という基礎的研究によって可能となったのである。

しかし、ドイツ・イデオロギーの完成版がその弛まぬ営為から刊行されたのは、ようやく 2017 年のことであった (Marx, Karl u. Friedrich Engels. 2017. Deutsche Ideologie. Manuskripte und Drucke. Karl Marx Friedrich Engels. Gesamtausgabe (MEGA) Erste Abteilung. Werke/Artikel/Entwürfe. Band 5. Hrsg. von der Internationalen Marx-Engels-Stiftung, Amsterdam. Berlin/Boston: Walter de Gruyter GmbH.) ここに来て初めて、初期マルクスの全貌を垣間見ることができるようになったのである。廣松渉・新編輯版『ドイツ・イデオロギー』 (岩波文庫、2002 年) もかなり正確に編纂されていたとはいえ、その完全版ではないのである。

[German original]

Die Produktion der Ideen, Vorstellungen, des Bewußtseins ist zunächst unmittelbar verflochten in die materielle Thätigkeit & den materiellen Verkehr der Menschen, Sprache des wirklichen Lebens. Das Vorstellen, Denken, der geistige Verkehr der Menschen erscheinen hier noch als direkter Einfluß ihres materiellen Verhaltens. (Deutsche Ideologie, S.135)

[English translation]

The production of ideas, of conceptions, of consciousness, is at first directly interwoven with the material activity and the material intercourse of men — the language of real life. Conceiving, thinking, the mental intercourse of men at this stage still appear as the direct efflux of their material behaviour. (Marx and Engels. 1976. The German ideology. Moscow, 1976, Third revised edition., p. 42)

19 世紀のドイツで使われていた“Verkehr”は多義的である。日本語では、「交通」あるいは「通交」と訳されるが、物流・性交 (sexual intercourse) そして今の交通のいずれにも使われていたようである。しかし、そこではドイツ語圏特有の言語文化の変容と重層化も同時に進行しており、この多義性ゆえに、当初、マルクスとエンゲルスは、“Verkehrsverhältnisse” (= modes of “exchange”) を使っていたものが、次第に、“Produktionsverhältnisse” (= modes of “production”) という表現のみ、後に生き残ることになった。この変化はドイツ・イデオロギーの中の多様な草稿の構成から読み取ることができる。また、新たに Web 版での再構成の試みもある (<http://online-dif.com>) 。

この問題は田中の議論にも影を落としているが、齋藤の主張であるエコロジスト・マルクスは、マルクスの人生終盤に誕生するという仮説も、完成版ドイツ・イデオロギーそしてそれ以降に関しても、さらに多様な書き込みや手稿を詳細に検討するならば、問題が残ることになる。本当に資本論の中での経済成長主義からの転換であったのだろうか。齋藤はそのドイツ・イデオロギーの完成版を博士論文作成時には利用できていなかったからである。

これは一事例に過ぎないが、経済学史・思想史そして経済史・環境史は、改めて、親密な対話が必要である。とりわけ、人びとが生きている場所に着目し、“Verkehr” のようにそこで日常的に

使われている言語の意味と自己理解と社会の持続そして変化、さらに科学知や技術知の進展を検証することが課題である。この活動と対話を通して、18世紀から20世紀初頭に至る、地球上の「長い19世紀」の「経済」の環境史の見直しを行うことができれば、「自然の不平等」が依然として存在し続け、またさらに、極端気象などの現象により、大いなるダメージを個々の地域に与え、その不平等をさらに頑健なものに作り替えてしまう可能性を少しでも軽減できるかもしれない。そうなれば、そのローカルな生命空間に着目する方法は、高度分業社会を維持しつつも脱経済成長へと向かう一つの戦略として評価できるようになるかもしれない。大いなる実験場でもある過去を学ぶことによって、それぞれの地の自然的個性を尊重し、将来への新たな選択肢を科学的基盤に基づき提示することができればと考える。

ここに、田中の著作を徹底的に止揚し、そして、田中のいう「不連続性の連続性」を確認し、常に新たな要素の **coupling**（結合）を模索していく場として、「環境経済史研究会」を発足し、継続させたいと考えており、多くの方々の賛同を得たいと望んでいる。

2021年9月4日

村山 聡

香川大学名誉教授

The International Consortium for Earth and Development Sciences (ICEDS)

共同代表（香川大学）

URL: <https://researchmap.jp/read0188434/>

Email: murayama.satoshi@kagawa-u.ac.jp

参考文献：

Murayama, Satoshi, and Hiroko Nakamura. 2021. "“Industrious Revolution” Revisited: A Variety of Diligence Derived from a Long-Term Local History of Kuta in Kyô-Otagi, a Former County in Japan" *Histories* 1, no. 3: 108-121. <https://doi.org/10.3390/histories1030014>